

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 18 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520452

研究課題名（和文）名詞判断文を中心とした構文類型の分布調査と認知構造の解析

研究課題名（英文）A Study of the Distribution of Sentence Types, with a Focus on Copula Sentences and their Cognitive Structure

研究代表者

王 亜新 (OH ASHIN)

東洋大学・社会学部・教授

研究者番号：30287552

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語と中国語の対照研究を通じて、名詞判断文を中心とした構文類型を分析し、それに関わる認知構造を解明する。本研究は主に、1) 名詞判断文を中心とした構文類型の分布に関する数値的統計、2) 中国語の名詞判断文（“是”構文）における“（一）个 NP”の意味と機能、3) 名詞述語による「主述述語文」における日本語と中国語の構造と機能上の相違、4) 名詞判断文における時間構造の現れ方、などを明らかにしている。

研究成果の概要（英文）：This study examines, by means of a contrastive analysis of Japanese and Chinese, the typology of sentence construction, focusing in particular on the copula sentences and their cognitive structure. This study comprises 1) a statistical analysis of the percentage usage of the copula sentence, as compared with other types of sentence in Japanese and Chinese. 2) an analysis of the semantic features and functions of “yige NP” in copula sentences in Chinese. 3) an analysis of the differences in the structure and function of sentences with Subject-predicate predicates in Japanese and Chinese, and 4) a study of the time structure of copula sentences in Japanese and Chinese.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語類型論、構文類型、分布調査、名詞判断文、認知構造、時間構造、日中対照研究

1. 研究開始当初の背景

言語によって構文類型の選択使用が異なる傾向を見せることは広く観察される現象である。しかし、それに関する言語類型論及び対照言語学の立場からの調査と研究はまだ少な

く、特に名詞判断文の選択と使用に関する日中対照研究が遅れている状況である。

日本語と中国語は構文類型の選択と使用においてそれぞれの特徴を見せ、中国語では動詞述語文の使用率が高く、日本語では名詞判

断文またはそれに準じた構文形態が多用されている。また、日本語では格助詞と語尾活用形態の発達などによって比較的長く、複雑な構文が構築できるが、中国語では格標示形態の欠如などにより相対的に文が短く、その代わり多様な構文類型が使用されるという傾向が見られる。このような違いは、日中両言語の品詞分布などの違いにも関わるが、構文の形態と機能、話し手の主観性及び認知構造上の違いにも関わっていると考えられる。

日本語と中国語では、構文類型の選択と使用について共通の言語理論に基づいた対照研究がまだ少ない現況を踏まえ、名詞判断文という最も基本的な構文から研究を始めることは構文類型全体に関する対照研究の契機となることを期待する。

2. 研究の目的

本研究は、認知言語学と言語類型論の立場から日本語と中国語との対照研究を通じて、1)名詞判断文を中心とした構文類型の使用分布に関する数値的統計、2)日本語と中国語の名詞判断文の意味関係と構文機能、3)名詞判断文における時間構造の現れ方、などを分析し、それに関わる認知構造を明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

本研究は、小説を中心とした言語資料の解析から着手し、構文類型の分布及び名詞判断文の基本構文・関連構文の分布状況について調査統計を行い、その上で名詞判断文の構造と機能上の特徴及びそれに関わる認知構造上の特徴を明らかにする。

中国語については、従来の研究成果を踏まえ、さらに日本語の名詞判断文に関する認知言語論的な研究方法と成果を吸収して、共通の言語理論のもとで二つの言語の共通点と相違点を明らかにする。

4. 研究成果

(1)日本語と中国語における名詞判断文を中心とした構文類型の分布調査

中国語と比べて、日本語では名詞判断文が多用される傾向がみられるが、明確な数値的統計による裏づけがないので、実際の状況は不明である。本研究は、日本語と中国語から一定量のデータを抽出して調査し、名詞判断文を中心とした構文形態の使用状況について数値的統計を行った。

この統計調査では、日本語と中国語の小説を解析して単文を抽出し、その中心的述語句を名詞・形容詞・動詞別に分類して数値的統計を行った。また、日本語では名詞判断文に準じた「名詞系成分+だ」という文末形態、中国語では非述語的な“是”の使用状況についても調査した。調査対象素材は、日本語からは12作品(約67万字)で、中国語からは9作品(約32万字)計100万字規模である。

統計の結果から見れば、日本語における使用率は動詞述語、形容詞述語、名詞述語という順であり、中で名詞述語の割合は8.0%で、3つの構文形態のうち使用率が最も低いことが明らかになっている。それに対して中国語の“是”構文と「名詞謂語句」の合計が約8.2%で、ほぼ日本語に見合った数値である。

一方、日本語では名詞判断文のほかに、助動詞など「名詞系成分+だ」という名詞述語に準じた文末形態が多用されているので、今回の調査ではこれらの名詞系形態も調査の対象とした。調査の結果として、日本語では名詞判断文および名詞系文末形態を合わせて約20%の使用率を占め、それに対して、中国語では“是”構文と「名詞謂語句」および非述語用法の“是”と“是…的”文を合わせても12%であり、日本語のほうが使用率が断然高いということが確認されている。

日本語では、名詞判断文の他に、「のだ」など名詞系文末形態が多用され、形態的に「…だ」という形で文を終わらせるという構文上の特徴が見られるので、中国人学習者に日本

語では名詞判断文の使用率が高いという印象をあたえた理由の一つと考えられる。

今回の統計調査は、人的条件などの制限で比較的小規模のものに留まっているが、構文形態の使用と分布に関する初めての調査として価値の高いものと判断する。また、調査を通じて構文形態の解析に関する多くのデータが蓄積されたので、今後、多角的な分析に生かされることが期待できる。(王亜新)

(2) 中国語の“是”構文における“一个NP”の機能について

中国語の“是”構文は、「彼は先生だ」という意味に対して、a“他是老师”、b“他是一个老师”という二つの述語形態が可能である。本研究は先行研究を踏まえて、述語“是(一)个NP”の意味機能およびそれが形成されるメカニズムについて分析を試みた。

“（一）个”は物事の「外的特徴」である「数量」を表すので、述語NPの「外形的特徴」が顕著であるほど“（一）个”が必要となる。また“是”構文において、主語NPが「役割」か「値」かによって“（一）个NP”の意味が異なるので同じ“S是（一）个NP”でも「対象指定」と「属性叙述」という二つの意味関係を表すことができる。前者の場合は“（一）个”が必須である。

“一个NP”の基本機能は「対象指示」に由来するので、「属性叙述」はその機能の拡張と考えられる。その際“一个NP”は「実体」から「属性」を表すように機能が変化し、“（一）个”も「実数」から「非実数」を表すように機能が変化している。そのため、「属性叙述」を表す“（一）个NP”は「典型的個体」を表すというプロトタイプ効果をもたらし、命題に合わせた「本質的」な属性を引き出すのに機能しているのである。

一方、裸の類名詞NPは、単純な「属性叙述」では形容詞に類似した、内包的機能を果たしているが、「他の類との対照」では排他的な定

名詞句として働き、その場合の類名詞は名詞の外延的機能を果たしている。

名詞判断文における述語NPは外延と内包という二つの機能を果たしているが、二つの機能は連続的につながっており明確に切り分けることはできない。そのため、“是”構文における“（一）个”は、必須の場合と不可の場合を除き、「習慣」的に使用されている一面も見られる。その場合“（一）个NP”には本来持っている「実体的・可視的・個別的・外的特徴」などのニュアンスを伴うことになる。

本研究は“（一）个NP”に関する従来の研究成果を一部修正しながら、新しい知見を提示している。(王亜新)

(3) 名詞判断文における「対象指示」機能について

日本語と中国語の名詞判断文は、類似した構造を有し、「属性規定・対象指定・同定」などの機能を果たす点でも基本的に類似している。また「同定」を表す場合、主語と述語の入れ替えが可能だなどの点でも共通している。

一方、日本語と中国語は、英語と違って名詞句をそのままの位置で疑問詞に置き換えて疑問文にすることができるにもかかわらず、日本語の「誰が彼か」と中国語の“谁是他”はいずれも非文である。本研究では、その非文の原因を名詞句の意味機能と名詞判断文の構文機能から分析を試みている。

一般的に、名詞(句)は「対象指示」と「属性づけ」の二つの機能を持っているが、「対象指示」はさらに「実体指示」と「概念指示」の二つに分けることができる。「実体指示」と「概念指示」は「対象指示」という指示機能の異なった側面で、一般名詞(集団名詞)だけでなく、固有名詞または指示詞や人称代名詞など、従来、「実体指示」にしか機能しないとされてきた名詞(句)にも機能しているものである。どちらを表すかは文脈に基づいて判別する必要があるが、それ自体は名詞句の基本

的な意味機能と考えられる。

「誰が彼か／谁是他」において、指示代名詞「彼／他」が「実体指示」を表す場合は、文が成立できないが、「概念指示」を表す場合は成立可能である。ただし後者の場合は特別な文脈からの支えが必要になる。その際、疑問詞「誰／谁」は「実体」を求めているので、現場指示にあたる「どの人／哪个人」による「どの人が彼か／哪个人是他？」などの文に置き換えて表現すべき場合もある。

本研究では、名詞句の「対象指示」を「実体指示」と「概念指示」に細分してその意味機能をより深く観察している。(王亜新)

(4) 日本語と中国語の主述述語文の構造上の違いについて

本研究では、日本語の「カキ料理は広島が本場だ(XはYがZだ)」などを「主述述語文」の一つとしてとらえ、その構造と機能上の特徴について分析した。

このタイプの構文は「主述述語文」の構文バリエーションの一つとして述語部において「[説明焦点(Y)]が[説明される側面(Z)]だ」という機能を表している。この種の構文は「Zだ」部分の品詞別で複数のパターンに分けられ、例えば、a「鼻は象が長い」、b「辞書は新しいのがよい」、c「カキ料理は広島が本場だ」、d「魚は、鯛がよい」など異なった基礎構文に由来する文も、「Xとうい話題で、Yが説明焦点を提示し、Zが説明の側面を提示する」という点で「家族的類似性」を持つ構文のグループとしてまとめられる。

この構文において、1) 主題Xは、話題(範囲)を提示し、「YがZだ」で主題Xについて説明を行う。その中でYは説明焦点として提示されている。2) Zは既知か既知扱いされた成分として、Yとは「同一関係」で結ばれている。3) Zは、説明焦点Yは主題Xにとってどの側面で関連づけているかを提示成分である。4) YとZは互いに唯一に対応する「排他

的な関係にある、などの特徴が確認される。

中国語には“鼻子是大象长”や“姜是老的辣”などの類似構文があり、文中の“是”は説明焦点を提示する役割を果たし、日本語の「が」に類似している。しかし、名詞判断文(“是”構文)では“是”が系動詞として働いているので、標示の重複を回避するという原則から、新たに「焦点提示」を表す“是”を加えることはできなくなるので、名詞述語文という構文形態では日本語と同類の構文が作れないことになる。また、格標示形態が乏しい中国では、構造的に「主体X(的側面Y)－属性(Z)」という語順を維持する必要があるので、Zは「説明の側面」より、「説明」として働く必要があり、日本語と同類の構文が作れない原因の一つとなっている。

日本語では、格標示の「が」は、説明の焦点と対象指定の機能を顕在化させるので、「YがZだ」において、Yは説明焦点で、Zは説明焦点以外の成分であるという意味構造が保障されている。そのため「Zだ」に置かれる名詞(句)の許容範囲が広く、抽象的な名詞も受け入れることが可能であるが、それに対して中国語では“Y是Z”は、基本的に「主体(側面)－属性」という「対象指定」か、「主体－主体」という「同一認定」の意味関係を維持する必要があるので、属性説明または対象提示で機能しない抽象的な名詞句はZの位置に置けなくなるのである。

主述述語文の使用において、日本語と中国語で多くの共通点が見られ、ともに「対象指定」と「同一認定」の機能を果たすことができるだけでなく、XとYは論理的関係を維持しなくてもよい、などの点で類似性を見せている。しかし、構造上の制約があるので、すべての構文形態において対応関係を持っているというわけではない。

本研究は、日中対照の立場から主述述語文の構造と機能について従来の研究では触れていない側面から分析を行っている。(王亜新)

(5) 名詞述語文における時間構造について

本研究では、日本語の名詞述語文と中国語の“是字句”・“名词谓语句”について、その時間構造のあらわれ方を中心に、対照比較研究を行った。

本研究では、まず名詞述語文を運動・状態・存在・特性・関係・質などの意味関係に注目して、名詞述語文における時間的なあらわれ方が意味関係によって異なること、運動や状態などの意味関係では時間との関わりが深いこと、特性や質などの意味関係では時間との関わりが少ないことを明らかにした。

日中両言語では、名詞述語文の質や特性などの変化を表す場合、それぞれ「名詞+了」、「(名詞)になる」という構文形態を用いる。この場合、外的な時間構造と内的な時間構造から考察することが可能である。対応関係のある用法において、中国語の[名詞+了]文も、日本語の「(名詞)になる」文も、以前の状態(特性・質)から新しい状態(特性・質)への内的な時間的限界に到達したことを表すのに用いられ、特にパーフェクトの用法が多くあることを認めた。また、[名詞+了]文、「(名詞)になる」文が使用されるかどうかは、以前の状態(特性・質)からある新しい状態(特性・質)への内的な限界達成性を表すかどうかによって決定されることも認めた。

また、時間構造に縛られない日本語の「～は(／が)～だ」の名詞述語文と[名詞+了]でない中国語の“‘是’字句”と“名词谓语句”は、状態(特性・質)を特徴としてとらえるのに対して、中国語の[名詞+了]文と日本語の「(名詞)になる」文は、状態(特性・質)を出来事としてとらえることを明らかにした。

さらに、日本語には、中国語の[名詞+了]文に対応する表現形式形としていくつかの構文形態がある。「もう～だ」という構文形態も可能である。中国語の[名詞+了]文に対応する日本語の表現形式は多彩である。

なお、日中両言語において生じた時間表現上の違いは、主に日本語の形態(フォーム)が多機能的であることに起因すると考えられる。中国語の“了”は、内的な時間的限界への到達を表す標識であるが、基本的に外的な時間構造を直接に表さない。外的な時間構造は、文構造や文脈あるいは時間を表す言葉を通して表現するのが一般的である。それに対して、日本語ではテンスとアスペクトをセットとして表現する。まさにこのような違いがあることによって、[名詞+了]文とそれに対応する「(名詞)になる」文において違いが起きると考えられる。

本研究は従来の研究では触れていない側面から名詞述語文の時間構造について分析を行っている。(王学群)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

①王亜新、中国語の“是”構文における“(一)个NP”の機能について、日中言語対照研究論集(日中対照言語学会)、査読有、第14号、2012年、p72-86

②王亜新、非賓格動詞構文在日漢語中的表現、日語研究(漢日対比語言学研究会)、査読有、第8輯、2012年、(掲載確定)

③王亜新、日本語と中国語における名詞述語文の使用率に関する数値的統計の試み、応用言語学研究論集(金沢大学)、査読無、第5輯、2012年、p1-15

④王亜新、日本語と中国語の名詞述語文に見られる共通点と相違点、東洋大学人間科学総合研究所紀要、査読有、第13号、2011年、p79~92

⑤王亜新、日本語の「カキ料理構文」とそれに対応する中国語表現、日中言語文化研究論集(白帝社)、査読無、2010年、p177~192

⑥王学群、名詞述語文における時間構造につ

いて―“名詞+了”文とそれに対応する日本語文、日中言語文化研究論集（白帝社）、査読無、2010年、p193～210

⑦王亜新、日本語と中国語における「間接行為構文―構文ネットワークの観点から―」、日中言語対照研究論集（日中対照言語学会）、査読有、第12号、2010年、p15-32

⑧王学群、中国語時間構造の研究―体系的な視野から―、語学教育研究論叢（大東文化大学語学教育研究所、査読有、第27号、2010年、p201～218

〔学会発表〕（計6件）

①王学群、名詞述語文の属性と時間性―日中対照の観点から―、日中対照言語学会・2011年度冬季大会、2011年12月18日、大阪産業大学（大阪梅田）

②王亜新、日本語と中国語の名詞述語文の構造と機能に関する分析―“誰が彼か”などの非文分析を通じて、漢日対比言語学研究会・第3回日中対照言語学シンポジウム、2011年8月16日、杭州師範大学（中国杭州市）

③王亜新、日本語と中国語の名詞判断文に見られる共通点と相違点、日中対照言語学会・2010年度冬季大会、2010年12月26日、大阪産業大学（大阪梅田）

④王学群、名詞述語文における時間構造について、漢日対比言語学研究会・第2回国際シンポジウム、2010年8月15日、黒龍江大学（中国ハルビン市）

⑤王亜新、非対格動詞構造の日本語と中国語での現れ方、漢日対比言語学研究会・第2回国際シンポジウム、2010年8月14日、黒龍江大学（中国ハルビン市）

⑥王学群、日中両言語における時間構造の対照研究―「見る」と“看”を中心に、漢日対比言語学研究会・第1回国際シンポジウム、2009年8月29日、北京大学（中国・北京市）

〔図書〕（計1件）

①王亜新、中国語の構文、（株）アルク、2011

年、383ページ

〔その他〕

①王亜新、日本語と中国語における「間接行為構文」について（講演）、2009年12月27日、福建師範大学（中国福建省）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

王 亜新 (OH ASHIN)
東洋大学・社会学部・教授
研究者番号：30287552

(2) 研究分担者

王 学群 (OH GAKUGUN)
東洋大学・経営学部・教授
研究者番号：40447222

(3) 連携研究者 (0)